もうひとつの日本地図（3）

賑栄い塾から上野村へ

～一人一人がコミュニティの拠点となる世界を～

田 恩伊 (チョン ウニ)

再び、いのちの源流へ

「賑栄い塾」が終わった。2015 年 10 月 10 日（土）～10 月 12 日（月）の 2 泊 3 日間「再び、いのちの源流へ」というタイトルで行われたが、事実上「終わり」という区切りをつけたこととなる。 1996 年から年 1 回の合宿形式で 20 年間行われ、今回は秩父の中津川にある山奥で開催された。

私は以前ある論文に「生活の場を共有しない緩やかな共同体」という表現を用いて「賑栄い塾」を説明し、次のように書いたことがある。

「このグループのメンバーは，今も過去自分達が立ち上げたコミューン，もしくは共同体村に住んでいる人もいるが，コミューンという形の中で生きることを変えた人たち，そして今後共同体の中で生活してみたいなど，さまざまなタイプと年齢層が参加している。この会合の主なメンバーは，過去 60 年代の後半からコミューンや共同体運動に深くかかわっている人たちである。「1960 年代の後半にコミューンや共同性，生命（いのち）の解放を模索する時代の盛り上がりの中で出会った 3 人（阿木幸男・岸田哲・野本三吉）が，自分たちの生き方を見つめ直す場を持とう」と「3 人の会」を結成したのが始まりである。初めての会合を 1996 年東京で開き，毎年 1 回のペースで合宿の形で行われている」

「賑栄い塾」は「広い意味でのコミューンやいのちの共同性」を求めている人たちが参加しており，毎年 30 人～70 人程度の人が 参加してきた。東京、奈良、沖縄、山梨，水俣、ヤマギシ会、大江山、秩父など，場所を変えながら会合を持ち続けてきており，第 5 回目から「3 人の会」から「賑栄い塾」と名称を変更したのである。今回は沖縄 をはじめ、新潟、東京、大阪、三重、神戸、水俣、福岡、京都、、、等々、約 63 名が全国から集まって来た 。秩父での開催は 2 度目であり、今回が最後となった。

もともと定款や会員制などの規定がある会合ではなく、「3 人の会」からはじまった 「関係性」のネットワークが次々と生み出した「つながり」が 年 1 度の合宿型の会合に結びついてきたものである。開かれた会合ではあったが、確かにどこかうっすらと閉じた感覚も存在していた。「関係性」に基づいた親密さが働く世界は本来そういうものだと思っている。そして、人間が生み出すあらゆる創意、創造、そして豊かな情緒の世界は「公共性」からではなく、この親密な世界から生まれるものだと思っている。「公共性」はこの「親密性」が生み出す世界に社会的な秩序を与えるものであろう。

「小さな賑栄い塾」をつくる

こうして、3 人のネットワークが生み出してきた「賑栄い塾」は 秩父の深い森の中で 20 年の歴史の終止符を打った。しかし「再び、いのちの源流へ」というタイトルが暗視でもしていたかのように、二日目のまとめの時間には、自分たちの足もとで「小さな賑栄い塾」をつくろうという提言が出された。自分の居場所でそれぞれにあった拠点をつくり「小さな賑栄い塾」をやろうという気持ちがどこか皆の心に共有されていたらしい。

実際「賑栄い塾」に参加している人は、自分の居場所で一定の拠点をもって活動している人が多く、 何らかの形を通して日常的に共同性を生きている。私が 2008 年に参加者たちのアンケートをとったことがあるが、「回答者の殆どは教育・福祉・農業・公務員（福祉関係）・団体職員が多く，ほぼ全員が「社会正義」や「社会問題」，すなわち「公」と関係する仕事を持っているか，関連する活動に参加していた。彼らは賑栄い塾を通して「公」と「私」両方の現実的なバランスを求めており、それには「場所」という概念や機能が完全に意味を失っているわけではない。合宿などを通して， 短期間共同体にコミットメントし、ライフスタイルや文化を共有しながら 徐々に共有の場を作って行く。 その共有の場は共同体といった形ではなく、個々の活動領域からなるものであるため、共同体とは名付けられないが、「場」と「共同性」を失わないものである。

提言は大いに受け入れられ，歓迎された。今までのネットワークと 20 年という時間に蓄積されたものを生かし、それぞれの居場所と近隣地域を中心に小さな賑栄い塾を自由に立ち上げ、一人一人がコミュニティの拠点となる生き方を生きる。そして、時期が熟せば、声をかけて大きな賑栄い塾を開けばよい。

1996 年に始まった「賑栄い塾」はこうして 2015 年 10 月に終わりをつげ 、再び新たな始まりを予言してくれた。

上野村へ

賑栄い塾を初めて知ったのが 2007 年だったので、もう 8 年の時が流れた。メンバーたちと日常的な交流はしていたが、塾には 4 回程度参加したと思う。賑栄い塾はもう最後になるよ、という話しを聞いた時に、心のどこかで感謝の気持ちを申しあげたいという気持ちが込み上げてきた。日本で生活しながら、塾の関係性が与えてくれたある種の親密な感覚に、私の心のどこかが安心感を覚えていたに違いない。そのお礼が言いたかったが、急に押し寄せてきた研究関係の仕事を塾に持ち込んでしまい、 皆に私の気持ちを伝える機会を逃がしてしまった。この紙面を借りて書いておきたい。“塾の皆さん、私の日本の生活に素敵な時間を与えてくれて、本当に有り難う！”

秩父から上野村まではそれほど遠くないということを秩父へ出発する 1 週間前に知った。 昨年の 3 月には内山先生を招聘して日韓国際シンポジウムも行ったが、 何年も前から上野村に行って見たいと思っていた。どうせ一人旅と同じことだと思っていたので、可能

↓第 20 回・最後の塾の様子

性はほとんどないという前提で、塾が終わったら上野村へ一緒に行きたい人がいるのか声をかけてみることにした。しかし、意外な反応と助け船があらわれた。塾のスタッフとしてボランティアをしているＫさんが上野村まで送ってくれるという事だった。Ｋさんは 丁度上野村へ向かう途中の秩父に住んでいるという。それに、15 才の時に姉 についてきて初めて塾に参加し、今は 20 代の素敵な女性として成長しているＮ姉妹も一緒に行きたいと言ってきた。こうして、半日を共にする４人の旅が急に決まった。その夜、３人は上野村の山奥にある宿泊先まで私を送る任務を終わらせ、 再び秩父に戻った。この半日の旅は山奥で始まり山奥で終わったが、上野村に辿りつくまでの間、私たちは 素敵な場所と人に出会えた。この話しは別の機会に書こう。

小さな拠点（compact village）づくり

上野村は人口 1315 人の群馬県で最も小さな行政村である。標高 1000mから 2000mに至る山々に囲まれ、12 の地区で構成されており、 実際には 12 地区それぞれの文化や 独特のお祭りを持っているという。面積の 96％が山林地域で可住地は 0.7％に過ぎない僻地であるため、外部の企業や産業誘致が困難な地域であった。それに、日本の木材の輸入が増えて木炭の需要は減少し、人口は減少一方の道を辿ることになり、1989 年には初めて UI ターン政策を実施することとなった。1985 年に起こった日航ジャンボ機墜落事故の現場としても知られているが、この時の救助活動に参加した村の消防団の活動は有名である。

「小さな村の自立と協働が地域を変える」。これは上野村の新・総合計画が表明しているスローガンである。この総合計画のために村人たちがワーキンググループに参画しており、そこで作成された「村づくり提言書」が総合計画に反映された。この総合計画の基本構想をなす分野別施策の中で私が非常に注目したのは、第一と第二の内容だった。その 第一は「地域資源を活かして山村産業を育てる村」としており、山村産業を含む地産地消と社会的企業の促進が組み込まれている。第二の「美しい自然と社会基盤が調和した村」には、循環型地域社会づくりが一番の順位になっていた。実際に村を見て回るとこれらの取り組みは現場で着々と進んでおり、現実化していた。

日本の地域作り・まちづくりは、一般に総合計画及び地域再生法が大きな総合案を立てて支援し、まちづくり３法によって支えられている。日本政府が 2005 年に公表した地域再生法は 2017 年に一部改訂されたが、非常に面白い内容が追加されている。その一つが「小さな拠点（compact village)）づくりを促進するということである。上野村は 1995 年に始まった平成大合併を拒否し、合併しないことを宣言していた。しかし、今やその「小さな拠点」づくりの一つのモデルとして浮かび上がって来ているのである。

身の丈に合う社会づくり

上野村の中間組織に当たる「産業情報センター」と村役場の振興課の担当者に村の説明を受け案内してもらった。日本のどこの田舎も同じ問題を抱えているが、上野村も人口減少の問題を解決するために、UI ターンの政策に積極的に取り組んでいた。同時に雇用創出に力を入れているが、印象的だったのは、雇用を作り出す産業内容である。上野村の基本構想第一と第二の内容に書き込まれているが、循環型地域社会に相応しい地域資源を活かした山村産業を育てるという考え方が反映されていたのである。

木質ペレット工場とバイオマス発電を始め、加工センター、新規の就農支援など、村直営の産業が幾つもあり、そのほかにも合同会社は協同組合などを持っていたが、これらすべては地域の資源をいかした産業であった。こうしたベースから社会的企業がつくりやすい環境になっていたのである。

→バイオマス発電機

その中でも、特に多くの視察や見学の依頼が殺到する分野は、ペレット工場とこれを使ったバイオマス発電である。96％が山林地域である上野村は、2011 年から搬出用の間伐の材木を活用したペレット工場をつくり、適切な間伐による山林保護と経済的効果、雇用創出をはかっていた。また、このペレットを使ったバイオマス発電によって生産された電気と熱は、村のきのこセンターや公共施設に使われ、2015 年からは各家庭にペレットストーブの普及を進めている。村の資源で生産したものは村で消費されるという資源と経済の循環が行われているということである。木材の間伐においても、森の再生や植林などの周期を計算して、一定の量だけを間伐するため、大きなペレット工場をつくることなどはしないということだった。

一人一人がコミュニティの拠点となる世界

もう一つ、印象的だったことは UI ターン政策である。上野村の 1315 人の人口の中で 243 人（2015 年 10 月現在）が I ターン者であり、18％にも上っている。人口減少は大きな流れからすると鈍化しており、1500 人程度の人口を目指して「身の丈に合う」生活の出来る村をづくりを目指しているらしい。そのためには雇用創出、住居の確保、生活支援策の充実という３本柱を建てている。上野村に定住する意思を持っている 45 才未満の人には最大３年間１世帯当たり５万円（独身３万円）を支給し、村営住宅を提供するなど、定住が落ち着くまでの支援策が非常に充実していた。村営住宅（家賃は 7000 円から 55000 円まで、平均 12000 円程度）は 138 世帯分もあり、ほぼ全世帯が運用中であった。そのほかにも、住宅取得の支援や奨学金など、多様な支援策が設けられている。そして、ターン政策の活性化のために、外部の専門家やＮＰＯなどとも積極的に協力関係を結んでいる。村の食堂で 緑のふるさと協力隊として派遣された若い女の子に偶然会って一緒に食事をしたが、彼女は上野村に住むことを考えているらしく、村を案内してくれた産業情報センターの人や役場の人に村の生活の悩みなどを積極的に打ち明けていた。 村民、中間組織、役場、そして外部からの支援との間に大きな隔たりがそれほど感じない村の雰囲気だった。

上野村を訪ねて感じた大きな特異点は、「身の丈に合う」という価値観が循環型「小さな村」づくりの隅々にまで反映されているということだった 。またこうした村の価値観に準じてつくられた産業や仕事場を UI ターンを希望する人々が前もって学習し理解出来るようなシステムが整っており、 何時でも就業が可能な条件を作り続けていた。

「場を共有しない緩やかな連帯」から、一つのコミューンのような社会を作っていく小さな村まで、一見異なった形で展開しているように見えるかもしれないが、実はこの二つは一つの方向性に向かって緊密に繋がっているような気がする。それは、どの形を選択してどのように生きようが、二つのタイプが目指している世界は、一人一人がコミュニティの拠点となる世界を築いて生きることだ。

※上野村訪問については、韓国の生態都市タムヤンデ（潭陽)で行われた 2015 年度の「グローバルエコフォラム」で紹介・発表した。